

大友持直について

大友持直は室町時代前期の武将である。持直は豊後大友氏十二代の家督相続後、大友家の内紛に巻き込まれた。また、持直の代は殆ど、筑前の所領をめぐって足利幕府を後ろだてとした中国の大内氏との抗争の連続であった。現在、亀川四の湯に持直の墓といわれる五輪塔がある。

一 大友氏の嫡子単独相続制

南朝元弘三年（北朝正慶二年、一三三三）、豊後大友氏六代貞宗が家督を五男千代松丸に譲って嫡子単独相続制を採用した。千代松丸は大友氏七代の家督を継ぎ、大友氏泰と名乗る。

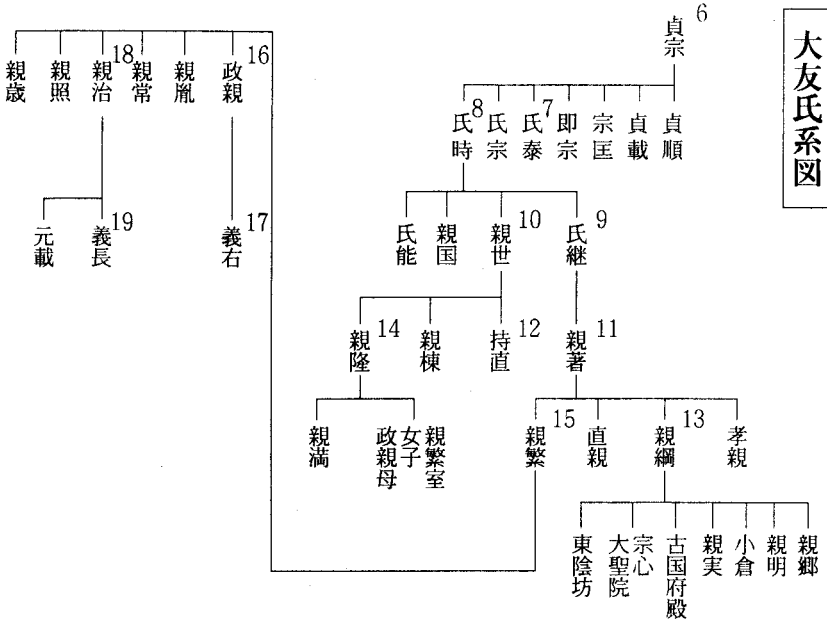
正平三年（貞和四年、一三四八）、大友氏泰には子どもがなく、弟氏時（八代、貞宗の七男）が家督を継いだ。正平十九年（貞治三年、一三六四）、大友氏時の長子



(伝) 大友持直の墓 観音寺

矢島嗣久

大友氏系図



宮松丸改め孫三郎氏繼（九代）が元服し、足利二代將軍義詮から豊後、筑前両国の守護職及び所領を安堵される。

文中元年（応安五年、一三七二）、この頃大友氏九代氏繼は征西府（懐良親王、後醍醐天皇の九男）に味方して南朝方となり、弟親世は九州（鎮西）探題今川了俊に味方して北朝方となる。今川了俊は名を貞世といい、剃髪後了俊と称した。了俊は今川国範の二男で、範氏の弟にあたる。

元中九年（明德三年、一三九二）十月に南北朝が合一して、本格的な室町時代となった。

応永元年（一三九四）、十代大友親世が足利幕府（三代義満）から正式に豊後守護職を安堵される。

親世は応永二十三年（一四一六）に兄氏繼の子親著（十一代）に家督を譲った。親世は甥に家督を譲ったことになる。

同年十一月、四代將軍足利義持（義満の長子）が大友親著を豊後、筑前の守護職（大友氏十一代）に任ずる。

応永二十五年（一四一八）二月十五日、大友氏十代親世が豊後府内（現大分市）で死去した。

親世の墓は大分市元町、国道十号線とJR久大本線との中間地点、マコモ（蔣）池跡に建っている。

二 両統交立と三角畠の乱

応永三十年（一四二三）七月、大友氏十一代親著が所領所職を従兄弟の持直（十二代）に譲った。当時持直の年令は十五、六歳である。

大友持直は、親著の父九代氏継の第十代親世の長男として生まれ、幼名を八郎といった。従って、九代氏継と十二代持直とは伯父甥の間柄にあたる。

持直は、母が戸次氏七代直光（頼時の子、直世の父）の娘で最初は戸次一族の松岡姓を名乗ったが、家督を譲り受けてから大友姓に改めた。また「持直」の名は將軍足利義持から一字「持」の字をもらったものである。

この頃から十五代親繁まで、氏継、親世兄弟の両統が交互に大友家の家督になる。これを大友氏における「両統交立の時代」という。

十二代大友持直の後継者には従兄弟の親著（十一代）の四男親繁が決まり、親著の長男三十二、三歳の孝親と

二男親綱は家督コースからはずされてしまった。孝親としては十二代持直（十五、六歳）は自分よりも若く、まして十三代に指名された弟親繁も年下である。親繁は実際に、およそ二十年後の文安元年（一四四四）に、大友氏十五代の家督を継ぐことになる。

不満をもった孝親は、応永三十二年（一四二五）九月十三日、荏隈郷（大分市）古国府三角畠で乱を起し、持直に攻められて討死にした。一説には三角畠の乱は大分郡挾間町古野郷（現挾間町古野北方）ともいう。

孝親が父親著を殺害したとなっているが、親著はけがをしたくらいで生き延びていることが古文書によって判明している。

この事件の背後には、豊前・筑前守護職に任じられた中国周防・長門国の守護、大内盛見（法名徳雄、弘世の三男、義弘の弟）の策謀が作用しているらしい。

永享元年（一四二九）、この年大友刑部少輔持直が初めて修好使節を朝鮮に派遣する。

「豊後国志」によれば、永享元年に大友持直が別府亀川平田に円通山観音寺を再興すると伝えている。また、

「御越村内社寺調査帳」には、この観音寺は室町時代の永享八年（一四三六）の中興（再興）にして、持直は、「観音寺殿前中書侍郎通玄理光大禪門」と法号するとある。しかし、この年は持直が京極氏及び大内氏の大軍に攻められ、豊後海部郡姫岳（臼杵市）が落城した年であるから、このような余裕はなかったのではないかと思われる。

三 大内氏と大友、少弐氏との戦い

永享三年（一四三一）六月、豊前・筑後両守護職に補任された大内氏五代盛見が、前年以來大友氏の筑前国の所領を奪おうとして争い、筑前糸郡萩原（現福岡県糸島郡二丈町深江付近）で大友持直・少弐氏十代満貞（九代貞頼の子）・菊池十八代兼朝（十七代武朝の子）らと戦って敗死した。盛見は享年五十五歳である。その結果、豊前は大友持直の所領となった。

翌永享四年（一四三二）一月、豊前国規矩郡（現福岡県北九州市）において再び大友氏と大内持世・菊池兼朝らとの戦いが始まる。

同年十月頃、足利幕府（六代義教）が大友持直の守護職を没収して、肥後の菊池氏のもとにのがれていた親綱（十三代）を豊後守護職に任じた。親綱は大友氏十一代親著の二男で、三角畠で敗死した孝親の弟にあたる。

永享五年（一四三三）三月、幕府が大内氏六代持世の要請により、少弐満貞、大友持直両名の懲罰のため旗を与える。持世は大内義弘の長子で、持盛の兄にあたり、大友持直や少弐満貞から筑前萩原で討ち取られた盛見の甥にあたる。

同年四月、大内持世が安芸・石見の山名時熙の軍勢と共に、大友持直に加担した弟大内持盛を豊前小倉（現福岡県北九州市）に追いつめ清水山に破って敗死させた。持盛は享年三十七歳である。

同年八月、大内持世が筑前二嶽城（秋月城、福岡県甘木市）を攻め、少弐満貞を自殺させた。満貞は享年四十四歳である。

同年九月から十月にかけて、足利幕府が大内持世に命令し、周防山口から大内氏の軍が豊後に侵攻して大友持直を攻め、別府乙原の吉祥寺（現ラクテンチ内）を焼

き払った。

乙原の吉祥寺跡にはこの戦いで戦死した寺侍の墓を寄せ集めた「二十八人塚」が建てられている。

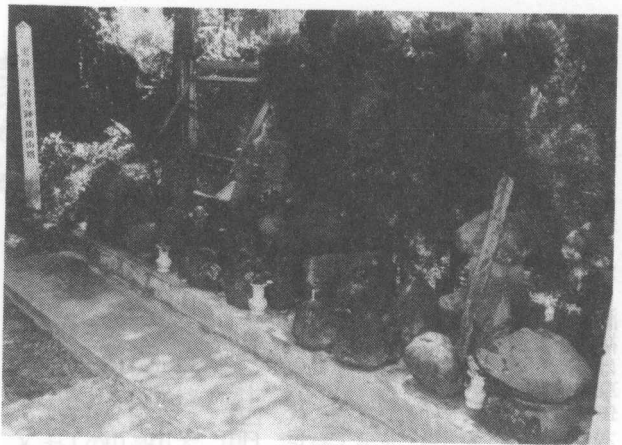
持直は大内軍の大軍を防ぎきれずに、府中（大分市）から船に乗り逃亡した。

同年十二月、大友持直と従兄弟の親著（大友氏十一代）が豊後に帰国する。その結果、大内持世に加担した大友親著の子親綱が豊前に逃れた。

同年に持直は親綱（十三代）に家督を譲っている。従って、持直は応永三十年（一四二三）七月から永享五年（一四三三）まで、十一年間大友氏の家督についていたことになる。

翌年の永享六年一月、九州探題渋川満直（満行の子）が肥前国神埼（現佐賀県神埼郡神埼町）で少弐満貞の弟横岳頼房と戦って敗死した。満直は享年四十五歳である。そのため、同年十一月、足利幕府（義教）は満直の子万寿丸（教直）を九州探題とする。

四 豊後姫岳の戦い



吉祥寺跡

二十八人塚

永享七年

（一四三五）

五月、大内持

世は安芸・石

見・伊豫三国

の連合軍と共

に、再び豊後

に侵攻して大

友持直を破り

豊後に遁走さ

せた。同年六

月、持直は豊

後海部郡姫岳

（現大分県臼

杵市）に籠り応戦する。姫岳は標高六百二十メートル、

臼杵市の南部、津久見市の西方で、両市の境界地点にあ

たる。

同年六月、幕府は中国の大内持世と四国伊豫国守護職河野通久（河野通義の子、通直の父）の連合軍を動員し

て豊後姫岳を攻めさせる。この戦いで幕府軍、伊豫国の河野通久らが戦死し、大内持世は破れて退いた。通久は享年四十二歳である。

同年八月、大内持世が大友持直、少貳嘉頼よしかち（満貞の子、教頼の父）と戦いこれを破る。嘉頼は当年十五歳であった。

同年十月頃、六代將軍足利義教が、姫岳で戦死した河野通久の子教通（通直）に豊後臼杵庄を与えた。

永享八年（一四三六）二月、幕府が出雲の京極持高（高光の子、持清の兄）らに命じて大内持世を援助し、大友持直、少貳嘉頼を討伐させる。

同年、六月一日、大内持世が少貳嘉頼と戦い敗れる。しかし、六月十一日には大内持世が大友持直の豊後姫岳を内応させ陥落させた。敗れた持直は再び行方不明となった。「編年大友史料」によれば、この姫岳合戦に速見郡別府から石垣三郎五郎・立石主計丞・竈門松徳丸かまどらが出陣したと記されている。

永享九年（一四三七）、この年、大友持直が親著の四男親繁（親綱の弟）の使いに付けて朝鮮に使いを派遣す

る。

永享十一年（一四三九）、この頃、大友氏十三代親綱（親著の二男）が持直の弟親隆ちかたか（十四代、十代親世の子）に所職・所領を譲る。また、親著・持直・親繁らの残党がなお各所に活躍した。

翌永享十二年、大友親綱や親繁の父にあたる十一代大友親著は、この頃まで生きていたらしいことが古文書から確認されている。親著の墓は大分市大字丹生川字上久所の県道（坂ノ市中戸次線）北側の田圃の中に建っている。

嘉吉元年（一四四一）六月二十四日、赤松満祐・教康のりやす父子が京都赤松邸において將軍六代足利義教を殺害し、播磨に逃れた。義教は享年四十八歳である。

同年七月二十八日、將軍義教暗殺事件の際、重傷を負った大内持世が没する。一説には事件当日の六月二十四日ともいう。持世は享年四十九歳である。

同年九月十日、赤松満祐が播磨国木（城）山城（現兵庫県龍野市新宮町）で、山名持豊（宗全、教豊の父）らに攻められて自殺した。満祐は享年六十一歳である。こ

れを「嘉吉の乱」という。反幕府側である大友持直はこの戦いで赤松満祐方に味方した。

同年十月、幕府が豊後志賀城（大野郡朝地町志賀）の志賀武蔵守親賀（山城守親方の子、親泰の父）に大友親隆、親綱と協力して、持直以下の残党を討たせる。

持直は、嘉吉二年（一四四二）の暮れごろには戦いに敗れて、再び行方をくらましてしまった。

五 嫡子単独相続と持直の墓

文安元年（一四四四）七月、幕府が大友十三代親綱の弟親繁（十五代、親著の四男）を豊後守護職に任じた。

これは十四代親隆がその長女を親繁の妻とする条件で家督を譲ったものである。一説には親隆が親繁を養子にしたともいう。親綱は、親隆の従兄弟十一代親著の四男にあたり、親綱の弟である。従って親繁は持直側（反幕府方）から親綱・親隆側（幕府方）となった。

大友氏は九代氏継から氏継・親世（十代）両統交代の時代が続いていたが、十五代親繁から嫡子単独相続制に戻ることになる。

文安二年（一四四五）一月四日、大友氏十二代中務大輔持直が死去した。おそらく、持直は豊後を離れた地で亡くなったものと思われる。享年三十七、八歳である。

しかし、朝鮮の記録「東海諸国記」では、長祿元年（一四五七）に持直が朝鮮へ使節を送ったとあり、死んだのは長祿三年（一四五九）十月と記されている。この記録を信じれば、持直は五十二、三歳まで生存したことになる。

別府市大字亀川四の湯町二区、平田橋の西側にある円通山観音寺の本堂の裏山墓地には、大友持直の墓といわれる五輪塔がある。この五輪塔は総高一・一五メートルで銘文はみられないが、室町期五輪の代表作である。

なお、持直の墓のそばには大小五十数基の五輪塔が寄せられている。

「郷社八幡かまた門神社伝記」（明治四十年三月）によれば、天長三年（八二六）八幡宮に神宮寺が置かれ、長福寺・光明寺・自応寺・他応寺・観音寺・養徳寺の六坊ができたところ。従って、この観音寺こそ、伝天長三年の神宮寺の一院であったということになるであろうと

「別府市誌」(昭和六十年、一九八五)に記されている。

慶長五年(一六〇〇)の秋、大友宗麟の嫡子、二十二代義統よしむねと豊前中津城主黒田甲斐守長政の父黒田如水孝高よしたかとが速見郡別府の石垣原で戦ったとき、この亀川平田の観音寺も焼かれてしまった。



観音寺山門

四の湯

その後、寛文二年(一六六二)には豊前小倉城主(福岡県北九州市)小笠原氏が観音寺の堂宇を再興したが、江戸末期の嘉永五年(一八五二)十二月に、盗賊中太郎によって再度焼かれたという。

観音寺は明治九年(一八七六)に住職が入り、同十八年(一八八五)には本堂が再建された。その後、約百年を経て昭和五十九年(一九八四)十二月には現在の本堂が再建され、今日にいたっている。

引用参考文献

- | | | |
|----------|------|---------|
| 大分県の歴史年表 | 渡辺澄夫 | 大分合同新聞社 |
| 豊後大友一族 | 芥川龍男 | 新人物往来社 |
| 豊後大友物語 | 狭間 久 | 大分合同新聞社 |
| 大分県の歴史 | 渡辺澄男 | 山川出版社 |
| 大分県史 | 中世編Ⅱ | 大分県 |
| 大友氏系図 | 芥川龍男 | |
| 大分百科事典 | 別府市誌 | 狭間町誌 |